抑うつ の 素 質 - ス ト レ ス ・ モ デ ル に お け る 性 差 の 検 討 : 対 人 場 面 に お け る あ い ま い さ へ の 非 寛 容 を 認 知 的 脆 弱 性 と し て ⁽¹⁾

同志社大学大学院文学研究科⁽²⁾
友野 隆成

同志社大学文学部
橋本 宰

An examination of gender difference on diathesis-stress model of depression:
Interpersonal intolerance of ambiguity as a cognitive vulnerability

Takanari Tomono*¹ and Tsukasa Hashimoto*²

(*¹ Graduate School of Psychology, Faculty of Letters, Doshisha University,

*² Department of Psychology, Faculty of Letters, Doshisha University)

This study examined diathesis-stress model of depression that used interpersonal intolerance of ambiguity as a cognitive vulnerability and interpersonal stress event as a stressor by gender. One hundred ninety college students (89 males, 101 females, aged 18-23) participated in the study. They were asked to complete Interpersonal Intolerance of Ambiguity Scale (IIAS), Self-Rating Depression Scale (SDS), and interpersonal stress event scale. Hierarchical regression analysis showed that only when diathesis variable was intolerance of ambiguity on close relation, diathesis-stress model was supported. And different interaction effect was obtained by gender. These results were suggested that interpersonal intolerance of ambiguity was partially applicable as a cognitive vulnerability of depression and were also showed gender difference.

Key words: interpersonal intolerance of ambiguity, interpersonal stress event, diathesis-stress model, depression, gender difference.

問 題

近年、抑うつ の 発 症 原 因 に 個 人 の 認 知 機 能 を 重 視 し た、認 知 行 動 的 な ア プ ロ ー チ に よ る 実 証 的 な 研 究 が 盛 ん に 行 わ れ て い る。そ の う ち の 一 つ の 理 論 に、抑 う つ の 素 質 - ス ト レ ス ・ モ デ ル (diathesis-stress model of depression) が あ る。こ の モ デ ル で は、抑 う つ に 対 す る 認 知 的 脆 弱 性 (cognitive vulnerability) を 持 つ 個 人 が ネ ガ テ ィ ブ な ス ト レ ス イ ベ ン ト を 経 験 し た 時 に、認 知 的 脆 弱 性 を 持 た な い 個 人 よ り も 抑 う つ が 生 じ や す い こ と を 示 し て い る。抑 う つ の 素 質 - ス ト レ ス ・ モ デ ル

は 多 く の 研 究 で 支 持 さ れ て い る (例 え ば、Metalsky, Halberstadt & Abramson, 1987; Metalsky & Joiner, 1992; 高 比 良, 2000 な ど)。ま た、そ の 発 展 と し て Abramson, Metalsky & Alloy (1989) に よ る 抑 う つ の 絶 望 感 理 論 (hopelessness theory of depression) に お い て も、素 質 - ス ト レ ス ・ モ デ ル が 理 論 の 中 心 を 占 め て い る。

抑 う つ の 素 質 - ス ト レ ス ・ モ デ ル に 関 す る 研 究 で は、認 知 的 脆 弱 性 と し て 主 に 説 明 ス タ イ ル (な ぜ 出 来 事 が 起 こ っ た の か に つ い て の 推 論) を 中 心 に し た 研 究 が 進 め ら れ て き た。し か し、園 田 ・ 藤 南 (1999) は、先 行 研 究 の 多 く が 素 質 変 数 と し て 説 明 ス タ イ ル し か 取

り上げなかったことを指摘している。そのことに関連して、抑うつへの認知的脆弱性になり得るその他の素質変数が、Boyce、Parker、Barnett、Cooney & Smith (1991) によって紹介されている。例えば、依存性 (Birtchnell, 1984)、神経症傾向 (Coppen & Metcalfe, 1965)、強迫性 (Klein & Depue, 1985) などである。そこで本研究では、認知的脆弱性になり得る可能性のある変数として、あいまいさへの非寛容 (intolerance of ambiguity : 以後 IA と略記) を取り上げる。

IA は、権威主義者の特徴をパーソナリティ特性として概念化したものであり (Frenkel-Brunswick, 1949)、“対称性、熟知性、明確さ、規則性に対する過度の好み、白か黒か式の解決、過度に単純化された二分化、あれかこれかという無条件の解決、早すぎる終結、固執、ステレオタイプの傾向”と定義されている (Frenkel-Brunswick, 1954)。つまり、あいまいな状況におかれた際にそのあいまいさに耐えることができず、そこから脱却するために現実を無視して独断的な認知処理を行ってしまうパーソナリティ特性である。この定義によると、あいまいさに耐えられない者の認知は、Beck、Rush、Shaw & Emery (1979) による、抑うつ者の体系的な推論の誤り (logical thinking errors) と共通する部分がある。Andersen & Schwartz (1992) は、そのことを考慮に入れつつ IA を抑うつへの認知的脆弱性として捉え、素質—ストレス・モデルの検討を行った。その結果、あいまいさに非寛容な者はネガティブなストレスイベントが生じた時に、絶望感を媒介して抑うつに陥ることが示された。一方、Kraus (1977) は躁うつ病者の行動様式や感情の特徴を、上述の IA 概念を当てはめて説明しており、躁うつ病者はあいまいな状況におかれると、その両義性に耐えることが出来ず、白か黒か式の解決法に逃げ込む傾向があると述べている。これらのことより、IA は抑うつへの認知的脆弱性になり得ることが想定される。

ところで Beck (1983) は、その個人のもつ特異的な認知的脆弱性と実際経験するストレスイベントの内容が一致した時、より抑うつに陥りやすいという領域合致の仮説を提唱している。この仮定によると、例えば対人関係に関する認知的脆弱性を持つ人が対人ストレスイベントを経験した時に、より抑うつに陥りやすく

なることが考えられる。この観点からすれば、IA を抑うつへの認知的脆弱性と捉え、対人領域に絞った IA と対人ストレスイベントについて検討する必要があるように思われる。先の Andersen & Schwartz (1992) の研究では、領域の限定されていない一般的な IA と、同じく領域が非限定的なストレスイベントについて検討されていた。今日、対人関係のストレスは日常生活で最もストレスフルな出来事と考えられている。大学生を例にとると、最もストレスフルな出来事のうち対人関係に関する出来事が、男性では26%、女性では34%を占めている (津田・尾関・片柳, 1997)。また、対人関係に関するネガティブな出来事が抑うつへの予測に大きく寄与している (高比良, 1998a)。これらのことから、領域を対人場面に限定し、IA との関連を検討することには意義があると考えられる。

友野・橋本 (2001) は、以上の点を踏まえ、対人場面におけるあいまいさへの非寛容尺度 (Interpersonal Intolerance of Ambiguity Scale : 以後 IIAS と略記) を作成している。さらに、友野・橋本 (2002b) は IIAS を用いて、日常生活で最もストレスフルな出来事と考えられている対人関係のストレスに焦点を当て、抑うつへの絶望感理論の検討を行った。その結果、対人場面におけるあいまいさへの非寛容 (interpersonal intolerance of ambiguity : 以後 IIA と略記) と対人ストレスイベントとの交互作用が有意に抑うつを予測していた。このことから、IA を対人場面に限定した場合でも、抑うつへの認知的脆弱性になり得ることが示唆された。

ここで、一つの問題が浮上する。それは、抑うつに関する性差の問題である。Nolen-Hoeksema (1987) は、抑うつへの生起に関する理論的、実証的な先行研究をレビューし、反応スタイル (response style) の違いという観点から、男性よりも女性の方が抑うつになりやすいことを示唆している。わが国でも、男性に比べて女性の方がうつ病に罹りやすいことが報告されている (日本母性衛生学会, 2003)。これらのことを受けて、抑うつへの予測に関する性差の検討に主眼を置いた研究が少なからず報告されている。例えば、内藤・木島・北村 (1999) は、Cloninger、Svrakic & Przybeck (1993) が提唱した4つの気質と3つの性格 (それぞれ

の詳細は、Cloninger et al, 1993を参照)を認知的脆弱性として、抑うつ³の生起に寄与するパーソナリティ特性の検討を男女別に行った。この研究では交互作用効果の検討はなされていないが、女性では4つの気質のうちの1つである損害回避 (harm avoidance) が抑うつ³の変化を予測したのに対し、男性では抑うつ³の変化を予測する変数はみられない、という結果が得られた。また、Barnett & Gotlib (1990) は、抑うつ的なスキーマ (schema) である非機能的態度 (dysfunctional attitude) を認知的脆弱性として、ストレスイベントおよびソーシャルサポートとの交互作用が抑うつ³の変化を予測するかどうか男女別に検討した。その結果、女性では非機能的態度とソーシャルサポートの交互作用が抑うつ³の変化を予測したのに対し、男性では抑うつ³の変化を予測する交互作用効果はみられず⁽³⁾、非機能的態度の主効果も見られなかった。さらに、高比良 (2000) は、帰属スタイルを認知的脆弱性として、対人領域および、課題の達成や問題解決などに関する達成領域のストレスイベントとの交互作用効果を男女別に検討した。その結果、男性では達成帰属スタイルと達成領域のストレスイベントが抑うつ³の変化を予測し、女性では対人帰属スタイルと対人領域のストレスイベントが抑うつ³の変化を予測していた。これらの先行研究は、いずれも性別の違いにより抑うつ³を予測する規定因が異なることを示唆するものである。

これらのような性差を示唆する研究結果がある一方で、前述の Andersen & Schwartz (1992) では全く性差の検討がなされておらず、友野・橋本 (2002b) では、性別をダミー変数として回帰方程式に投入したのみで、それ以上の詳細な性差の検討はなされていない。しかしながら、IA は男性では認知的評価を媒介して積極的対処に影響を与える一方で、女性では認知的評価を媒介しないで積極的対処に影響を与えるという、性別によって異なる関連性がみられるという報告もあり (友野・橋本, 2002a)、認知的脆弱性と抑うつとの関係を検討していく上で性差を明らかにする必要があると思われる。そこで本研究では、抑うつ の素質—ストレス・モデルに焦点を当て、IIA と対人ストレスイベントの交互作用が抑うつの変化を予測するかどうか、また男性と女性とでどのような交互作用のパター

ンの違いが見られるかについて検討することを目的とする。

方 法

調査協力者および調査時期 2000年10月下旬～12月中旬の間に、京都府下の大学生を対象に期間において2回の質問紙調査を実施した。本研究では、2回とも調査に参加した190名（男子89名、女子101名）を分析対象にした。平均年齢は19.66歳（SD＝0.98歳）であった。なお、1回目の調査（時点1）と2回目の調査（時点2）の実施間隔は、約1ヶ月半であった。

測定 1. 対人場面におけるあいまいさへの非寛容：友野・橋本（2001）による、対人場面におけるあいまいさへの非寛容尺度（IIAS）を用いた。この尺度は31項目からなり、親しい関係におけるあいまいさへの非寛容（close-related intolerance of ambiguity：以後 CRIA と略記；項目例：友人が悩んでいるのにそのことについて話してくれない時、私は落ち着きません。）、一般的な知り合い関係におけるあいまいさへの非寛容（general-related intolerance of ambiguity：以後 GRIA と略記；項目例：他人が私を評価する時は、とにかく明確で、隠しだてのない評価をして欲しい。）、未知の関係におけるあいまいさへの非寛容（stranger-related intolerance of ambiguity：以後 SRIA と略記；項目例：見ず知らずの人と一緒にいる時、私に対してどのように振舞うのか予想がつかないと、とまどってしまいます。）の3つの下位尺度がある。各項目についてどの程度同意するか、それぞれ「とても強く同意する（7点）」から「全く同意しない（1点）」までの7件法で回答を求めた。これらは、3つの対人場面ごとに、あいまいさに耐えられないほど得点が高くなるように構成されている。分析には、3つの下位尺度それぞれの合計得点を算出して用いた。

2. 対人ストレスイベント：橋本（1997）による対人ストレスイベント尺度を用いた。この尺度は40項目からなり、各項目の出来事を過去1ヶ月の間に経験した場合は、その出来事でどの程度ストレスを感じたかを、それぞれ「非常に感じた（4点）」から「全く感じなかった（1点）」までの4件法で回答を求めた。ま

た、出来事を経験しなかった場合は、その項目得点は0点とした。これは、出来事を経験し、そのことがストレスフルであると感じるほど得点が高くなるように構成されている。分析には、全項目の合計得点を算出して用いた。

3. 抑うつ：自己評価式抑うつ性尺度 (Self-Rating Depression Scale：以後 SDS と略記；Zung, 1965) の日本語版 (福田・小林, 1973) を用いた。この尺度は20項目からなり、各項目について現在どの程度当てはまるか、それぞれ「ほとんどいつも (4点)」から「ない、たまに (1点)」までの4件法で回答を求めた。これは、抑うつを感じているほど得点が高くなるように構成されている。分析には、全項目の合計得点を算出して用いた。

実施方法 心理学実験室において、最少1名から最多で10名までの少人数による集団法で実施した。1回目の調査 (時点1：以後 T1 と略記) では、SDS、IIAS を実施し、2回目の調査 (時点2：以後 T2 と略記) では、SDS、対人ストレスイベント尺度を実施した。なお、両時点で高比良 (1998b) による拡張版ホープレスネス尺度も同時に施行されたが、本研究では分析から除かれた。

結 果

各測度の基本統計量 Table 1 に、各測度の平均値と標準偏差および α 係数を示す。なお、性差を検討するために各得点について t 検定を行ったところ、有意

Table 1 各測度の平均値と標準偏差

	全体			男性			女性			(df=188) t 値
	M	SD	α	M	SD	α	M	SD	α	
時点1における抑うつ	41.11	6.96	.76	41.70	6.68	.74	40.59	7.19	.79	1.090
時点2における抑うつ	40.17	7.12	.78	40.17	6.27	.73	40.18	7.82	.82	-.009
対人ストレスイベントの認知的評価	65.97	27.69	.92	66.55	27.92	.92	65.46	27.62	.91	.271
親しい関係における あいまいさへの非寛容	53.68	10.67	.82	53.99	9.91	.79	53.41	11.34	.85	.375
一般的な知り合い関係における あいまいさへの非寛容	52.49	7.61	.66	52.71	8.26	.69	52.31	7.02	.60	.362
未知の関係における あいまいさへの非寛容	37.56	5.68	.59	37.61	5.76	.59	37.52	5.64	.59	.099

Table 2 各測度間の相関係数

	親しい関係	一般的関係	未知の関係	認知的評価	抑うつ1	抑うつ2
親しい関係	—	.489***	.602***	.215*	.106	.251*
一般的関係	.543***	—	.312**	.110	-.052	-.072
未知の関係	.634***	.417***	—	.344***	.273**	.353***
認知的評価	.202*	.081	.147	—	.388***	.388***
抑うつ1	.176	-.003	.168	.329***	—	.820***
抑うつ2	.148	-.126	.073	.402***	.770**	—

右上：男性 親しい関係＝親しい関係におけるあいまいさへの非寛容

左下：女性 認知的評価＝対人ストレスイベントの認知的評価

抑うつ2＝時点2に測定された抑うつ

一般的関係＝一般的な知り合い関係におけるあいまいさへの非寛容

抑うつ1＝時点1に測定された抑うつ

* $p < .05$

** $p < .01$

*** $p < .001$

な得点差は見られなかった。しかし、本研究の目的は性差の検討であるので、以後の分析は男女別に行った。

各測度間の相関係数 Table 2に、各測度間の相関係数を示す。男女とも IIAS の下位尺度間には、それぞれ中程度の有意な正の相関がみられた。そして男性では、CRIA と対人ストレスイベントの認知的評価 (cognitive appraisal of interpersonal stress event：以後 CAISE と略記)、T2 抑うつとの間に弱い有意な正の相関がみられた。また、SRIA と、T1、T2 抑うつとの間、CAISE との間に弱い有意な正の相関がみられた。それに対して女性では、IIAS の 3 下位尺度とその他の尺度との間には、CRIA と CAISE との間に弱い有意な正の相関がみられたのみで、その他の組み合わせにおいて有意な相関はみられなかった。

素質・ストレス・モデルの検討 抑うつ・素質・ストレス・モデルを検討するために、T2 抑うつ得点を基準変数とした階層的重回帰分析を男女別に行った。分析に先立ち、多重共線性の危険性を低減するため

に、交互作用項を形成する 2 変数を平均からの偏差に換算するセンタリング (Cohen & Cohen, 1983) を行った。分析は、T1 の抑うつ得点、CAISE 得点、IIA 得点、交互作用得点 (CAISE 得点と IIA 得点の積) の順に回帰方程式に投入した。素質変数として、CRIA 得点を投入した場合、男女とも有意な主効果および有意な傾向である交互作用効果が見られた。その結果をそれぞれ Table 3 と Table 4 に示す。本研究では交互作用の検討が目的であるので、以後は交互作用効果についてのみ述べる。なお素質変数として、GRIA 得点と、SRIA 得点を投入した場合、有意な交互作用効果はみられなかった。

上述のとおり、得られた交互作用効果はいずれも有意傾向であったが、男性では CRIA の有意な主効果、女性では CAISE の有意な主効果がみられているので、性別によって異なる交互作用のパターンがみられることが想定される。そこで、その内容を明確にするために、Cohen & Cohen (1983) の手続きに従って、単回帰直線を求めた。これは、T2 抑うつ得点を基準変数とする回帰方程式に、T1 抑うつ得点の平均と、IIA 得点および、CAISE 得点の平均 ± 1 標準偏差を代入

Table 3 抑うつの変化に関する階層的重回帰分析 (男性)

ステップ	投入された変数	R^2	ΔR^2	F	p for ΔR^2	pr
1	時点 1 における抑うつ	.672	.672	178.241	.000	.80
2	対人ストレスイベントの認知的評価	.678	.006	1.544	.217	.12
3	親しい関係におけるあいまいさへの非寛容	.701	.023	6.685	.011	.30
4	交互作用	.712	.010	2.990	.087	.19

Table 4 抑うつの変化に関する階層的重回帰分析 (女性)

ステップ	投入された変数	R^2	ΔR^2	F	p for ΔR^2	pr
1	時点 1 における抑うつ	.593	.593	144.199	.000	.73
2	対人ストレスイベントの認知的評価	.617	.025	6.295	.014	.23
3	親しい関係におけるあいまいさへの非寛容	.618	.000	.034	.855	.05
4	交互作用	.629	.011	2.860	.094	.17

することにより、交互作用項を形成する2変数の高低の組み合わせで抑うつ得点の変化量を算出するものである。

まず Figure 1 に、男性の場合の単回帰直線を示す。親しい関係におけるあいまいさに非寛容な者は、対人ストレスイベントの水準が強まるにつれ、T1 に比べて T2 抑うつ得点がやや増大する傾向がみられた ($pr = .19, p < .10$) が、対人ストレスイベントの水準が弱いと、時点1 に比べて時点2 での抑うつ得点がやや減少している傾向がみられた ($pr = .19, p < .10$)。一方親しい関係におけるあいまいさに寛容な者は、対人ス

トレスイベントの水準に関わらず、T1 に比べて T2 抑うつ得点は減少する傾向がみられた ($pr = .19, p < .10$)。次に Figure 2 に、女性の場合の単回帰直線を示す。親しい関係におけるあいまいさに非寛容な者は、対人ストレスイベントの水準によって、T1 に比べて T2 抑うつ得点が大きく増減する傾向を示した ($pr = .17, p < .10$)。一方親しい関係におけるあいまいさに寛容な者は、対人ストレスイベントの水準に関わらず、T2 抑うつ得点は T1 に比べてどちらもわずかに減少する傾向がみられた ($pr = .17, p < .10$)。以上のように、男性の場合においては対人ストレスイベント

Figure 1 親しい関係におけるあいまいさへの非寛容と対人ストレスイベントとの抑うつにおける交互作用 (男性)

Figure 2 親しい関係におけるあいまいさへの非寛容と対人ストレスイベントとの抑うつにおける交互作用 (女性)

の水準の強弱に関わらず、あいまいさに非寛容な者と寛容な者の抑うつ得点の変化量が逆転はみられなかったのに対し、女性の場合においては対人ストレスイベントの水準の強弱によって、あいまいさに非寛容な者と寛容な者の抑うつ得点の変化量が逆転することが示された。

考 察

本研究では、IIA と対人ストレスイベントとの交互作用が、抑うつの変化を予測するかどうか、男女別に検討することを目的とした。

階層的重回帰分析の結果、有意な交互作用効果の傾向がみられたのは、男女とも素質変数が CRIA の場合のみであった。その他の素質変数の場合は、男女とも有意な交互作用効果がみられなかった。このことから、男女に関わらず親しい関係におけるあいまいさに非寛容な者は、対人ストレスイベントがストレスフルなものである場合、抑うつ得点を増加させると言えよう。

しかし本研究において、女性の場合男性とは異なった興味深い交互作用効果がみられた。対人ストレスイベントがストレスフルなものである場合は、親しい関係におけるあいまいさに非寛容な女性は抑うつ得点が上昇している一方で、対人ストレスイベントがストレスフルなものではない場合は、寛容な女性よりもさらに抑うつ得点が大きく減少している。このことから、親しい関係におけるあいまいさに非寛容な女性は、対人ストレスイベントのストレス評価基準によって、抑うつ得点の落差が大きいと言えるだろう。Frenkel-Brunswick (1954) の提唱したあいまいさに非寛容な者の特徴である、過度に単純化された2分化傾向が、この結果に表れていると考えられる。すなわち、ストレスフルな状況とストレスフルでない状況を直截的に判断して評価することが、その個人の抑うつを左右していると考えられる。この結果は、あいまいさに非寛容な女性が認知的評価を媒介しないで積極的対処を行うという、友野・橋本 (2002a) の結果と共通するものであると考えられる。

Beck (1983) が指摘しているように、女性は男性よ

りも「対人関係志向性 (sociotropy)」が高く、人との相互作用により敏感な傾向があるとされている。この傾向は、素質—ストレス・モデルにおいて抑うつに寄与するストレスイベントが男女で異なるという結果からも示唆されている (高比良, 2000)。これらのことから本研究の結果を考察すると、親しい関係におけるあいまいさに非寛容な女性は、特に親しい人との間で微妙な行き違いが生じると、そのことをストレスフルな出来事と捉え、抑うつに陥ってしまうのかもしれない。また、あいまいさに非寛容な男性は対処に至る評価過程に分化と複雑化がみられる傾向があるのに対し、女性はより直截的に行動を起こす傾向がみられる (友野・橋本, 2002a) という、ストレス状況下における認知処理の差異が、本研究における性差を生み出したのかもしれない。この点に関しては、今後詳細な検討が必要である。

本研究の結果は、対人トラブル改善上で臨床的にも一つの示唆を与えるかもしれない。大坊・栗林・中野 (2000) は、大学生を対象に社会的スキルトレーニングの実習を行い、あいまいさ耐性が実習終了後に有意に上昇していることを示している (大坊, 2003)。本研究の結果を合わせて考えると、このことから、社会的スキルトレーニングはあいまいさ耐性を高める有効な手段であると考えられる。その結果親しい関係の間で生じたあいまいな問題に耐えられるようになれば、対人関係に関するストレスフルな出来事が生じても抑うつを予防することができるようになると考えられる。

最後に、本研究の問題点を述べる。最初は、ストレスイベントの領域の問題である。本研究では、対人関係に関するストレスイベントのみ検討し、達成領域に関するストレスイベントについては検討しなかった。Beck (1983) による領域合致の仮説に即して推察すると、IIA と達成ストレスイベントの交互作用は抑うつを予測しないことが想定される。一方、Teasdale (1985) は出来事の領域合致を仮定せず、脆弱性を持つ者がどのような領域のストレスイベントを経験しても抑うつを引き起こすことを示唆している。ここでは、対人以外のストレスイベントとの交互作用も抑うつを予測することが想定される。以上のことから、他のストレスイベントについても測定し、交互作用を検討する

必要があると考えられる。

二点目は、尺度の問題である。本研究で得られた交互作用効果は、IIAS の 3 つの下位尺度のうち CRIA のみであり、男女共に有意傾向でしか表れなかった。原因として、本研究で使用した対人ストレスイベント尺度の項目内容、並びに IIAS の信頼性および妥当性の不十分さが挙げられる。本研究で用いた対人ストレスイベント尺度（橋本，1997）の項目内容を見てみると、比較的あまり親しくない人との間で生じたストレスイベントに関するものが多く、不完全な領域合致であったために、有意傾向にしかならなかったと考えられる。このことから、対人ストレスイベントを細分化して、IIAS の 3 下位尺度それぞれとの領域合致を検討する必要があると考えられる。また、GRIA および SRIA を素質変数とした場合、有意な交互作用効果は得られなかった。本研究では信頼性の高低が結果の有意性を左右した可能性が考えられる。よって、IIAS に関しては、構成概念の精緻化など、更なる検討をする必要があると考えられる。

引用文献

- Abramson, L. Y., Metalsky, G. I., & Alloy, L. 1989 Hopelessness depression: A theory-based subtype of depression. *Psychological Review*, **96**, 358-372.
- Andersen, S. M., & Schwartz, A. H. 1992 Intolerance of ambiguity and depression : A cognitive vulnerability factor linked to hopelessness. *Social Cognition*, **10**, 271-298.
- Barnett, P. A., & Gotlib, I. H. 1990 Cognitive vulnerability to depressive symptoms among men and women. *Cognitive Therapy and Research*, **14**, 47-61.
- Beck, A. T. 1983 Cognitive therapy of depression : New perspectives. In P. J. Clayton, & J. E. Barrett (Eds.), *Treatment of depression : Old controversies and new approaches*. New York : Raven Press. pp. 265-290.
- Beck, A. T., Rush, A. J., Shaw, B. F., & Emery, G. 1979 *Cognitive therapy of depression*. New York : Guilford Press. (ベック A. T., ラッシュ A. J., ショー B. F., エメリー G. 坂野雄二 監訳 1992 うつ病の認知療法 岩崎学術出版社)
- Birtchnell, J. 1984 Dependence and its relationship to depression. *British Journal of Medical Psychology*, **57**, 215-225.
- Boyce, P., Parker, G., Barnett, B., Cooney, M., & Smith, F. 1991 Personality as a vulnerability factor to depression. *British Journal of Psychiatry*, **159**, 106-114.
- Cloninger, C. R., Svrakic, D. M., & Przybeck, T. R. 1993 A psychological model of temperament and character. *Archives of General Psychiatry*, **50**, 975-990.
- Cohen, J., & Cohen, P. 1983 *Applied multiple regression/correlation analysis for the behavioral sciences*. 2nd ed. Hillsdale, NJ : Lawrence Erlbaum Associates.
- Coppin, A., & Metcalfe, M. 1965 Effect of a depressive illness on M. P. I. scores. *British Journal of Psychiatry*, **111**, 236-239.
- 大坊郁夫 2003 社会的スキル・トレーニングの方法序説—適応的な対人関係の構築—対人社会心理学研究, **3**, 1-8.
- 大坊郁夫・栗林克匡・中野 星 2000 社会的スキル実習の試み 北海道心理学会第47回大会発表（北海道心理学研究, **23**, 22）.
- Frenkel-Brunswik, E. 1949 Intolerance of ambiguity as an emotional and perceptual personality variable. *Journal of Personality*, **18**, 108-143.
- Frenkel-Brunswik, E. 1954 Further explorations by a contributor to "The Authoritarian Personality." In R. Christie, & M. Jahoda (Eds.), *Studies in the scope and method of "The Authoritarian Personality"*. New York : Free Press. Pp. 226-275.
- 福田一彦・小林重雄 1973 自己評価式抑うつ性尺度の研究 精神神経学雑誌, **75**, 673-679.
- 橋本 剛 1997 対人関係が精神的健康に及ぼす影響—対人ストレス生起過程因果モデルの観点から—実験社会心理学研究, **37**, 50-64.
- Klein, D. N., & Depue, R. A. 1985 Obsessional personality traits and risk for bipolar affective disorder :

友野・橋本：抑うつ素質・ストレス・モデルにおける性差の検討：対人場面におけるあいまいさへの非寛容を認知的脆弱性として

- an offspring study. *Journal of Abnormal Psychology*, **94**, 291-297.
- Kraus, A. 1977 *Sozialverhalten und Psychose Manisch-Depressiver*. Stuttgart : Enke Verlag. (クラウス A. 岡本進 訳 1983 躁うつ病と対人行動 みすず書房)
- Metalsky, G. I., Halberstadt, L. J., & Abramson, L. J. 1987 Vulnerability and invulnerability to depressive mood reactions : Toward a more powerful test of the diathesis-stress and causal mediation components of the reformulated theory of depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 386-393.
- Metalsky, G. I., & Joiner, T. E. 1992 Vulnerability to depressive symptomatology: A prospective test the diathesis-stress and causal mediation components of the hopelessness theory of depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 667-675.
- 内藤まゆみ・木島伸彦・北村俊則 1999 抑うつ発起に寄与するパーソナリティ特性の性別による相違 性格心理学研究, **8**, 23-31.
- 日本母性衛生学会 2003 ウィメンズヘルス辞典—女性のからだところガイド— 中央法規出版株式会社
- Nolen-Hoeksema, S. 1987 Sex differences in unipolar depression : Evidence and theory. *Psychological Bulletin*, **101**, 259-282.
- 園田明人・藤南佳代 1999 絶望感理論の因果分析：ストレス反応に及ぼす素質と近接要因の効果 健康心理学研究, **12**, 1-16.
- 高比良美詠子 1998a 対人・達成領域別ライフイベント尺度（大学生用）の作成と妥当性の検討 社会心理学研究, **14**, 12-24.
- 高比良美詠子 1998b 拡張版ホープレスネス尺度（日本語版）の信頼性および妥当性の検討 性格心理学研究, **7**, 1-10.
- 高比良美詠子 2000 抑うつ発起のホープレスネス理論における領域一致仮説の検討 心理学研究, **71**, 197-204.
- Teasdale, J. D. 1985 Psychological treatment for depression : How do they work? *Behavior Research and Therapy*, **23**, 157-165.
- 友野隆成・橋本 幸 2001 対人場面におけるあいまいさへの非寛容尺度作成の試み 同志社心理, **48**, 1-10.
- 友野隆成・橋本 幸 2002a あいまいさへの非寛容がストレス事象の認知的評価及びコーピングに与える影響 性格心理学研究, **11**, 24-34.
- 友野隆成・橋本 幸 2002b 抑うつ発起の絶望感理論の検討：認知的脆弱性としての対人場面におけるあいまいさへの非寛容 同志社心理, **49**, 1-8.
- 津田 彰・尾関友佳子・片柳弘司 1997 ストレス—コーピング過程における性差 ストレス科学, **12**, 34-41.
- Zung, W. W. K. 1965 A Self-Rating Depression Scale. *Archives of General Psychiatry*, **12**, 63-70.

脚 注

- (1) 本研究は、友野・橋本(2002b)のデータを、新たな観点から再分析、再構成したものである。なお、本研究の一部は、日本心理学会第65回大会で発表された。
- (2) E-mail : tomono@psychology.doshisha.ac.jp
- (3) Barnett & Gotlib (1990) では、男性においてストレスイベントとソーシャルサポートとの交互作用が抑うつの変化を予測していたが、本研究では素質—ストレス—モデルの検討が目的なので、認知的脆弱性が含まれていないものは交互作用効果とみなさないことにした。

(2004. 4. 14 受稿, 2005. 11. 21 受理)